

四族となつた。文化事業も九〇年代から一〇〇〇年代に、各先住民族のエスノヒストリーや言語テキストの編纂もおこなれた（林修澈「台湾原住民族研究の新趨勢」一一〇〇六）。こうした先住民族やその文化に対する政策は、各先住民族の人々自身に、自文化への関心を引き起こしていった。

先住民族の宗教を執行していたシャーマンに対する意識も変化した。先住民族の文化を保護しようとしたとき、民族行事をつかさどるシャーマンは、民族文化を継承させる者として重要な視されるようになつた。アミ族ではこうしたシャーマンをシカワサイという。シカワサイは、花蓮市や郷がおこなう祭典や文化祭にしばしば招待され、儀礼を演じた。

しかし台湾社会は依然、漢人が主流を占めている。アミ族にも童乩をする者がいて、漢人文化への志向がうかがわれる。それがアミ族的文化への志向が強まる中、アミ族の宗教者のなかには、シカワサイでもないし、童乩でもない奇妙な神憑りを見せる宗教者が出現するようになつていた。シカワサイは、儀礼のとき魂が神のもとにでかけていき、そこで神世界を飛翔すると考えられている。その間、身体は地面にまるで寝ているかのようにあおむけに横たわっている。この状態を「臥」と「静」として表すことにする。それに対し童乩は、身体を震わせ、頭を振りながら、神憑り、躍動的に動き回る。その状態を「立」と「動」で表現することにする。九〇年代は「臥」「静」と「立」「動」という二種類の形態でさまざまな変化のタイプがみられた。

バリ島の宗教儀礼における  
トランスと変容力について

磯忠幸

た。国分直一の『壺を祀る村』（三省堂、一九四四年）には、戦前廟の前で全身を震わせ失神状態になるシラヤ族のシャーマンの話が出てくる。神憑りの形態そのものは広く台湾住民族社会と漢人の接触という面から考察せねばならない。九〇年代、アミ族で、童乩をすることはシカワサイ儀礼よりも強力な靈力があると思われていたなかで、アミ族童乩たちが、自分がアミ族であることを示す象徴をシカワサイ儀礼から積極的に取り入れていた。供物や踊り、言語など人により取り入れ方が違つたが、何かしらアミ族であることを示していた。それが神憑りでも「臥」「静」と「立」「動」の間で揺れ動く形態を示していたのではないのだろうか。定型をもたず、個々に違う状況は、アミ族宗教のシャーマンか、漢人宗教のシャーマンか、一九九〇年代の揺れ動く先住民族の姿を映していたとおもわれる。

言及されるにすぎず、バリ島の宗教の現状としての制度化をとらえる視点からは漏れてしまう。

近年では、ヒルドレッド・ギアツやミッショナル・ステファンらが、神秘主義思想に精通しているインフォーマントによる説明や秘教的なロンタール文書の読解に基づいて、聖なる力（サクティ）の動態性や変容を主題とする神秘主義的思想が宗教儀礼や演劇的ダンスに通底していることを示そうと試みているが、こうした試みのなかで、トランスと密接な関係のあるバロンとランダ、及びそれらが登場するチャロナラン劇の再検討が試みられている。

チャロナラン劇は悪魔祓いとして言及されているが、ギアツは、チャロナラン劇の目的が邪悪な存在を追い払うことではなく、そうした存在を説得して、惡意のあるものから善意のあるものへと「変容」させることにあると指摘している。またステファンは、創造神シワとその配偶者である女神ウマの物語をチャロナラン劇と関連づけ、チャロナラン劇を演じることの目的は、創造的な存在から破壊的な存在へ、そして再び創造的な存在へと変容するシワとウマをバロンとランダに重層化することで、危険で制御不能なものを肯定的に再方向づけるということであると指摘している。

ギアツにしろ、ステファンにしろ、神秘主義的思想で主題化される変容と実際の儀礼で生じるトランスとの関連には特に言及していないが、ジェーン・ベローが指摘するように、バロンとランダがトランスと特権的な関係にあること、そしてエリアーデがかつて述べたように、トランスが変容のプロセスである

ことなどを考慮すれば、トランスが神秘主義的な「変容」と密接に関連していると述べても過言ではないだろう。

バリ北東部の山岳地帯の村落で見られるサンギヤン（超自然的な存在がダンサーに憑依することで行われる悪魔祓いのトランスダンス）では、トランスになることを表現するのに、憑依される（keraoehan）ではなく、「なる」（nadi）という言葉が用いられ、トランスによって別様の存在に「なる」ことが重視されている。サンギヤンの起源がヒンドゥー導入以前に遡るものであり、ヒンドゥー導入後の儀礼的ダンスに影響を及ぼしているとするなら、チャロナラン劇におけるトランスにしても、神秘主義的思想の主題としての「変容」よりも、サンギヤンにおけるトランスの「別様の存在になる」という意義が根源的に重要なのかもしれない。

バリ島では、宗教をめぐる制度がどのように変化しようとも、宗教儀礼にトランスが伴われ続けているが、そのことはトランス状態になる個々人自身が「変容」すること以上の何かがあるのかもしれない。トランスとはそれ自体が既存の表現様式や存在様式に変容を引き起こす力動態なのであり、トランスが伴われることによってこそ、逆にそれを内包する形式が変容することが可能になるのではないか。バリ島の宗教の変化もそうした視点から検討し直してみる必要があるのかもしれない。